

The *Taketori Monogatari* as the beginning of the *monogatari* tradition: The value of the *Taketori Monogatari* as teaching material, and suitable teaching plans

TAKEHISA Yasutaka

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

In this paper, we focus on how the *Taketori Monogatari* is regarded as the beginning of the *monogatari* tradition, and proceed as follows: (1) We organize our discussion on prior research that identifies the meaning of the expression “the beginning of the *monogatari* tradition.” (2) We analyze the ascension scene from the *Taketori Monogatari* in terms of how it is viewed within the overall work. (3) Based on our analysis in (2), we propose a teaching method regarding the ascension scene from the *Taketori Monogatari*.

「物語の始まり」としての『竹取物語』
—— 『竹取物語』の教材価値とその授業案 ——

武久 康高 (高知大学教育学部)

一

『竹取物語』は、現行すべての中学校一年生用教科書に採録されている。その理由は様々あるだろうが、文章が平易で中学一年生にも文意がつかみやすいということ（『難易度の観点』）や「かぐや姫のお話」として絵本や映画で人々に親しまれていること（『生徒の興味関心の観点』）、「千年以上たった今でも変わっていない人間の心の在り方」（東京書籍）が物語の軸として描き出されていること（『作品の主題の観点』）、さらには「現存する日本最古の物語」（学校図書、東京書籍、光村出版）、「物語の出来はじめの祖」（学校図書、教育出版、東京書籍、光村出版）など「物語の始まり」（教育出版）として『竹取物語』が位置づけられていること（『文学史上の意味の観点』）等に本作品の教材としての価値が見出され、採録されていると考えられる。

さて、このうち稿者が注目したいのは、その文学史上の意味、つまり「物語の始まり」として『竹取物語』が位置づけられているということである⁽¹⁾。前述のように、「現存する日本最古の物語」や「物語の出来はじめの祖」などの説明がほとんどの教科書にあることから、本作品の文学史上の意味の理解は、『竹取物語』の学習において必要とされていると言える。だがおそらく多くの教室では、叙上のような文学史上の知識を伝えるのみの学習にとどまっておろ、「竹取物語」のどのような表現のあり方が「物語の始まり」として評価されているのかといった、作品の表現に即してその文学史上の意味を探っていくような学習はなされてこなかったと考えられる。

しかし稿者は、『竹取物語』の教材としての価値を、叙上のような表現のあり方を探っていくことよって、学習者自身が「物語の始まり」の現場を追体験したり、そこでの語りのあり方について評価（批評）できる点にあると考える。そこで本稿では、まず「物語の始まり」とはどのような表現のあり方を指しているのか、先行研究をもとに整理する。次に、そうした表現のあり方が『竹取物語』にどのようにみられるのか、教科書に採録されている「昇天」の場面を中心に分析する。最後に、以上のような分析をもとに、『竹取物語』における具体的な単元案やそこでの学習課題案について提示したい。

二

風巻景次郎は、「物語の始まり」に関わって、次のような整理を行っている⁽²⁾。

『竹取物語』を境として、それ以前と以後との相違を図式的に提示すれば、前者

は伝説のありのままの記述であるか、またはすくなくもありのままの記述を軸とした文章であって、漢文であるに對し、後者は伝説を軸とし、または伝説にたよって行なわれた虚構の作品であり、日本語の物語である。伝説を軸にしている点に歴史の継続が看取され、虚構の有無が境界の線を引きしている。

ここで風巻は、まず漢文による伝説そのものの記述がなされていた段階があり、次に『竹取物語』を境として、日本語⇨仮名文（秋山虔の指摘に従い、「日本語」を「仮名文」と読み替える⁽³⁾）による、伝説を軸とした虚構作品の創作段階へと移行したと整理している。つまり、仮名文の誕生を契機として『竹取物語』といった虚構作品（物語）が誕生したと捉えているわけだが、こうした風巻の整理を受けて秋山虔は、「なぜ漢文において」「虚構創作は成り立ち得なかったのか」と問いを発し、以下のように述べている⁽⁴⁾。

漢文に書かれる伝承——神怪異事・街談巷語・道聽塗説といった類が物語と區別されるのは、それが書契以前このかたの呪術宗教的な權威を相続するからではなく、一に中国の志怪小説に倣う文人漢学者の知識的慰戯にとどまるからであったといえよう。彼らの意識がいかに時世に抜きんで開明であっても、それが漢字漢文の權威に跪拜する限りにおいて、あくまで伝承は漢文化の素材であり、その趣味の満足を求める外在的な対象であるにすぎなからう。仮名文字による仮名文の書き手こそ、漢字漢文の權威から自由に、その規矩をふりほどいて伝承にわが心を潜入させ、そこに捕縛されることが、とりもなおさず伝承を、わが心の表現のよすがとして組み替え、伝奇⇨物語文学に変質させたのである。（中略——物語作者の）精神の向かい赴くところが、民間に飽和し社会に共有される伝承世界であった。ということとは、彼がそこに抱き取られ沈没するというのではない。かえってその世界を産室として文字によって空想をつむぎ、そのつむぎ出される世界のなかに、これまでけつしてなされることのなかった作業として人間の心を掘り起こすことになった。

秋山によれば、漢字漢文による伝承の記述とは文人たちの知識的慰戯に過ぎず、そこでの伝承とは、文人にとつて「漢文化されるための素材」でしかなかったと言う。しかしその後、漢字漢文の規矩をふりほどいた「仮名文の書き手」たちは、仮名文字で伝承を書くなかで「わが心」をもそこに潜入させる。つまり仮名文の書記過程において彼らは、一方で伝承世界に捕縛されつつも、そこで生じた「わが心」を表現する手法として、その伝承を仮名文を使って組み替えていく。それは、これまでなされるこ

とのなかつた「人間の心を掘り起こす」といった作業でもあった。このようにして生まれた仮名文による虚構の作品を、秋山は物語文学だとするのである。

さらに秋山は、物語文学の成立と伝承との関係について、『竹取物語』が「伝承の趣向・筋立てに倅取られている」こととともに「伝承者による語りという体裁を保持している」ことを指摘し、後者に関しては以下のように説明している⁽⁵⁾。

伝承者の語りくちをそのまま写し取ったとか、それが反映しているとかいう性質のものではない。物語の作者は誰に向かって語りかけるのでもなく、ただ紙に向かって文字をつらねる。漢文の述作の場合のように、制作者が自身の名を押し立て一定の視座から規矩に従って書くのではなく、寄るべなく放たれた心を仮名文の軌跡に託す。そのつらねられる文章によつて伝承とは異質の、わが心と悲喜を共にする人間の姿を織りつむぐのだが、その方法として彼は聞き手に向かう語り手になるのである。いわば虚構の語り手に自己を転位することにより、伝承ならぬ物語世界を共有すべき普遍の心々と連帯したのである。

「物語の作者」は、物理的には「ただ紙に向かって文字をつらねる」だけなのだが、その作品上で「伝承者による語りという体裁」をとることににより、「いわば虚構の語り手に自己を転位する」。そして、そのように仮構された語りの場において、語り手として「わが心と悲喜を共にする人間の姿」を語ることで、普遍の聞き手との間に心情的な連帯を求めていくのである。ちなみに秋山は、仮名文字の特徴について、「自己の肉声をそのまま表記し、そこに自己を容易に転移」できることとし、「かな文字を獲得した日本人は、この文字に託して自己の心のひだひだを展叙する作業を早くも開始することになった」と述べている⁽⁶⁾。このような仮名文字の特質こそ、仮構された語りの場において、作品世界を媒介とした語り手と普遍の聞き手との心情的な結びつきを可能とし、その結果、「人間の心」を描く虚構作品＝物語文学が生み出されていったのである。

*

以上のように、『竹取物語』に即した「物語の始まり」を、「人間の心」の「掘り起こし」(それは伝承世界の枠組みや仮名文の利用を通じた「虚構作品の成立」ともにあった)として捉える視点は、その後の『竹取物語』研究においても見られるものである。次に、『竹取物語』の研究史を踏まえた高田祐彦の発言を取り上げよう⁽⁷⁾。

『竹取物語』は、作品を構成する複数の話の枠組みが比較的是っきりした作品である。外形的には、小公子譚、致富長者譚、難題求婚譚、天人女房譚などの

複数の話型が組み合わせられて一編の物語ができあがっているが、内的には、それらを統合する論理が存在するはずである。『竹取物語』の研究史は、この論理をかぐや姫の心の追求という点に見定めてきた。月の都の存在であるかぐや姫が、人間らしい心を次第に獲得していったはてに、ついには月世界に帰る悲しみに捕われてゆくという心の動きを軸にして、心というものを持つ人間存在を見つめようとした、と捉えてきたのである。『竹取物語』という作品のもっとも中心を貫く主題として、その見方は正鵠を射ているであろう。

ここで高田は、主題に関する『竹取物語』の研究史について、本作品は「小公子譚、致富長者譚、難題求婚譚、天人女房譚」といった伝承世界に見られる話型によつて外形的には構成されているが、それらの話型は「かぐや姫の心の追求」という論理で内的に統合されており、そこから「心というものを持つ人間存在」のありようこそ本作品の「もっとも中心を貫く主題として」捉えられてきた」とまとめている。さらに別の論文でも高田は、『竹取物語』が古伝承と袂を分かつて虚構の物語文学として成立するには、「この人間の心を見つめる眼がきわめて重要な要素として作用したことはまちがいない」と指摘している⁽⁸⁾。つまり高田が、その研究史を踏まえながら『竹取物語』に即した「物語の始まり」として重視するのは、伝承世界の枠組みを利用しつつも「虚構の物語文学として成立する」際に見出される、「人間の心を見つめる眼」の存在であった。

もちろん、このような「人間の心を見つめる眼」の生成については、伝承世界に見られる話型を仮名文字で書いたら即生まれるといった、そんな単純なものではない。実際には同時代の言説状況、例えば人の心の推移を見つめた和歌の誕生⁽⁹⁾や神仙譚⁽¹⁰⁾・仏伝⁽¹¹⁾の受容状況、あるいは『竹取物語』に見られる話型・難題求婚譚の文学史的な達成⁽¹²⁾等も関係していることがこれまでの研究において指摘されている。ここではその一例として、物語文学の誕生へと作家を向かわせた「人間への興味関心」が、同時代の和歌史の動態と密接に関係していたと指摘する吉田幹生の論を引用しよう⁽¹³⁾。

『竹取物語』は二つの異なる伝承(話型)を組み合わせたところに成立したと推定されるのであり(引用者注——天人女房型説話と難題求婚譚)、さらに一般化して言えば、同じく民間伝承や街談巷語に触れながらも、それらを神仙譚的な枠組みで再解釈するのではなく、むしろそれらを利用して新たな伝承を生み出そうとするところに物語文学は誕生したのだということになる。／では、そのよう

な方向へと物語作家を向かわせたものは何だったのか。『竹取物語』について言えば、それは人間というものの興味関心であったと思われる。「世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らずは、あひがたしとなむ思ふ」というかぐや姫の発言を契機に展開される難題求婚譚や、昇天場面での天人と翁との対話などを通してかいま見られるのは、理性的な判断に感情が優先してしまうのが人間であるという見方である。「あはれ」の一語に集約されるこの人間観が、『古今和歌集』雑歌下に収められた「しかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあな憂世の中」(九三六・小野篁)「あはれてふ言こそうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ」(九三九・小野小町)といった歌の世界に通じることは明かだが、物語は伝承の枠組みを利用しつつ、理想の境地を願いながらもなお此岸で踏み惑わねばならないそのような人間の姿を描き出したのであった。この意味において、物語文学の誕生は深いところで和歌史の動態とも密接に関わり合っていたと把握すべきであろう。

『竹取物語』という物語文学の誕生について吉田は、「天人女房型説話」と「難題求婚譚」といった「二つの異なる伝承」を利用しつつ、そこから「新たな伝承」の創出——具体的には「理想の境地を願いながらもなお此岸で踏み惑わねばならない」ような「人間の姿」の描出(＝虚構の物語世界の描出)——へと「物語作家を向かわせたもの」こそ、同時代の和歌史において深められていた「人間というもののへの興味関心」であったと指摘している。つまりそれだけ「物語文学の誕生は深いところで和歌史の動態とも密接に関わり合っていた」のである。

以上、本節では、「物語の始まり」と評されるような表現のあり方について先行研究をもとにまとめてきた。ここでは、『竹取物語』以前の漢文での作品群のように伝承そのものが語られるのではなく、「人間というもののへの興味関心」を軸に複数の伝承が組み合わされることで、「新たな伝承」ともいえる虚構の作品世界が構築されていること、またそこには仮名文の誕生や和歌をはじめとした同時代の言説が密接に関わり合っていたことを確認した。次節では、こうした「物語の始まり」としての表現特性がどのように『竹取物語』にみられるのか検討したい。

三

前節でまとめたように『竹取物語』は、複数の伝承が「人間というもののへの興味関心」をもとに組み合わせられて生み出されたと言われているが、ここでは一体どのような伝承の枠組みが利用されているのだろうか。例えば野口元大は、『竹取物語』の構成と伝承の型との関係について、①かぐや姫の生ひ立ち(化生説話・致富長者説話)、②つまどひ(求婚説話の序)、③④⑤五つの難題(求婚難題説話)、⑥御狩のみゆき(求婚説話)、⑦天の羽衣(昇天説話)、⑧富士の煙(地名起源説話)と整理し、このうち「求婚難題説話の部分」を除いた箇所が「羽衣伝説とか天人女房譚とか呼ばれるもの」としている。すなわちここでは、「羽衣説話の間に、天女と人間の男との結婚の条を利用して求婚難題説話を割りこませて成立した物語」として『竹取物語』が捉えられているのである⁽¹⁴⁾。このような野口の理解——羽衣説話をもとにしながら、その説話の要素である「天女と人間の男との結婚の条」が難題求婚譚へと語り変えられ、説話内部に挟み込まれている——は『竹取物語』研究において標準的なものと言えるが、そこには柳田国男の『竹取物語』理解、つまり『竹取物語』は「羽衣説話のいづれかの段階を、足場にして立っている」ながら、物語中には「説話の変化部分、または自由区域」である五人の貴公子の難題求婚譚の部分が見られ、そこにこそ作品の獨創性が発揮されているとの考えが影響していると言える⁽¹⁵⁾。しかし近年では、この難題求婚譚の箇所も「説話の自由区域」などではなく、一人の女性をめぐって複数の男性が争う「妻争い伝承」の系譜を持つことから⁽¹⁶⁾、羽衣伝承と妻争い伝承の枠組みが中心となつて『竹取物語』が生み出されているという論が提出されている。

以上のような研究状況を踏まえ本稿では、『竹取物語』を、羽衣伝承(天人女房譚)と妻争い伝承(難題求婚譚)とが「人間というもののへの興味関心」をもとに鑄直されることで独自の虚構世界が作り上げられている作品だと捉え、以下、それぞれの伝承が具体的にどのように鑄直されているか(＝『竹取物語』の表現特性)について論じていく。だがその際、本稿では『竹取物語』の表現特性について、活動を通じて中学生自身が理解を深めていけるような授業の提案を最終的な目標とするため、作品の分析についても、より具体的な授業の場を想定しつつ行う必要がある。そこで『竹取物語』の教科書掲載場面を確認してみると、全社に共通しているのが「現代語によるあらすじ」と「冒頭」の場面であり、次いで「昇天」(四社)、「末尾」(二社)、「くちらもちの皇子」(一社)、「帝との交流」(一社)の場面である。こうした掲載場面の状況や実際の授業時間等も考慮に入れると、中学校の段階では、『竹取物語』「昇天」の

場面を取り上げ、そこにみられる表現特性について羽衣伝承との関係をもとに考える、といった授業が現実的であろう。そこで以下、『竹取物語』と羽衣伝承との関係に焦点を絞り、検討を続ける。

関敬吾によれば、羽衣伝承（天人女房譚）とはおおよそ次のような構造を持つという（17）。

- ①ある男が妻を得たいと神に祈願する。②a 神の教へにより、b 助けた動物の援助によつて、池（川、湖、海）のほとりで天女（一人または数人）が水浴してゐるのを発見する。③羽衣をかくして天女を妻にする。④一人乃至数人の子供が生れる。⑤天女は自身または子供の援助によつて羽衣を発見し天に帰る（単独または子供をつれ）。⑥夫は天女の教へた方法によつて跡を追つて天にのぼる。⑦a 父親の課する難題を果て再び夫婦になる。b 失敗し夫婦になれない。

こうした基本的な構造に近い伝承として『近江国風土記』逸文に採録された「伊香小江」の話がある。以下、書き下し文で引用しよう（18）。

古老の伝へて曰へらく、近江の国伊香の郡、与胡の郷。伊香の小江、郷の南にあり。天の八女、俱に白鳥と為りて、天より降りて、江の南の津に浴みき。時に、伊香刀美、西の山にありて遙かに白鳥を見るに、その形奇異し。因りて若しこれ神人かと疑ひて、往きて見るに、実にこれ神人なりき。ここに、伊香刀美、やがて感愛を生してえ還り去らず。竊かに白き犬を遣りて、天の羽衣を盗み取らしむるに、弟の衣を得て隠しき。天女、すなはち知りて、その兄七人は天上に飛び昇るに、その第一人はえ飛び去らず。天路永く塞して、すなはち地民と為りき。天女の浴みし浦を、今、神の浦といふ、是なり。伊香刀美、天女の弟女と共に室家と為りて、此処に居み、遂に男女を生みき。男二人、女二人なり。兄の名は意美志留、弟の名は那志登美、女は伊是理比咩、次の名は奈是理比売。こは伊香連等が先祖、是なり。後に、母、すなはち天の羽衣を捜し取り、着て天に昇りき。伊香刀美、独り空しく床を守りて、唸詠することやまざりき。

伊香刀美は白鳥の姿で水浴びをしていた八人の天女に心惹かれ、一番年下の天女の羽衣を犬に盗み取らせた。その結果、羽衣がなくなった天女は天に昇ることができず、地上の人となって伊香刀美と結婚した。その後、二男二女の母となった天女は羽衣を探し取つて天に昇つていき、伊香刀美は独り寝の床で嘆き続けたという。本話は異郷

から来た神が地上に子孫を残して帰つていくという構造をもつた氏族伝承であり、伊香刀美と「神人」との間に生まれた子が伊香連等の先祖であるといった、「一族の祖の出自を物語る」ことにその目的がある（19）。そのためか、例えば伊香刀美と結婚し子どもが生まれたときや天の羽衣を発見したとき、さらには夫や子どもを置いて天に昇るときなど、『竹取物語』をはじめその後の物語文学であれば必ず主題化されるであろう。「天女の心の動き」が全く語られていない。ちなみに視点人物である伊香刀美の心情はわずかながら語られてはいるが（20）、あくまで本話の中心は「神人」（天女）と一族の祖（伊香刀美）との結婚→子の誕生」という出来事を語ることなのである。

では一方で、「物語の始まり」とされる『竹取物語』において「天女（かぐや姫）の心の動き」はどのように描き出され、物語の主題といかなる関わりを持つのであるか（21）。

前述したように「伊香小江」の伝承では「神人」と一族の祖との結婚→子の誕生」を語ることがその主題であった。つまり、天上世界と地上世界との（ある氏族における）繋がりを語ること——そこにあるのは「地上の権威を保証するような形で異郷との交流が持続する」構図（22）である——が本伝承の目的だと言える。それに対して『竹取物語』では、天上世界と地上世界との繋がりでなく、むしろ両世界の相違や断絶が明らかにされる構図となっている。というのも、『竹取物語』における天人の特徴は「いとけうらに、老いをせずなむ。思ふこともなく侍る」というものであった。つまり、これら天人の住む天上世界は地上とは異なる理想的世界として表象されておき、そんな理想的な世界から「穢き」地上世界の「賤しき」翁・媪のもとに送られたのが、かぐや姫なのであった（そのためかぐや姫は、自らを「わづらはしき身」とし、五人の貴公子や帝との結婚を拒否する）。このように『竹取物語』では、天上世界と地上世界とが対比的に描かれている。そして本物語では、そんなかぐや姫が五人の貴公子や帝との求婚譚を経て次第に人間化していくさまを、彼女が「あはれ」という感情を身につけていく様子（「天女（かぐや姫）の心の動き」）を通じて描いていくのである（23）。ちなみに「伊香小江」の伝承においても、天女は「地民と為りき」と語られているが、その具体については全く語られていない。それに対して『竹取物語』では、その様子が（「あはれ」の感情のような）「人間としての心」をかぐや姫が獲得する過程として描かれていくのである。

そうしたなか、「とうとう天上世界に帰る」という本物語最大の山場で登場するの

が、「伊香小江」の伝承でも語られていた天の羽衣であった。ここでの天の羽衣は、「伊香小江」をはじめとした羽衣伝承のように天女の飛行機能を果たすのではなく、物語の主題と関わる別の機能が持たされている。以下、中学校教科書にも採録されている「昇天」場面を引用しよう。

天人の中に持たせる箱あり。天の羽衣入れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の天人言ふ、「壺なる御薬たてまつれ。穢き所の物きこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ」とて、持て寄りたれば、いささか嘗め給ひて、少し形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず。御衣を取り出でて着せむとす。その時、かぐや姫、「しばし待て」と言ふ。「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。もの一言、言ひ置くべきことあり」と言ひて、文書く。天人、「遅し」と、心もとながり給ふ。かぐや姫、「もの知らぬことななたまひそ」とて、いみじう静かに、おほやけに御文たてまつり給ふ。あわてぬさまなり。

かくあまたの人を賜ひて、止めさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、取り率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕へつかうまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば。心得ず思しめされつらめども、心強く、承らずなりにしこと。なめげなるものに思しめしとどめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる。

とて、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける
とて、壺の薬そへて、頭中将呼び寄せて、奉らす。中将に、天人取りて伝ふ。中将取りつれば、ふと天の羽衣うち着せてまつれば、翁を「いとほし、かなし」と思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、もの思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。

その後、翁・媪、血の涙を流して惑へど、かひなし。あの書き置きし文を読み聞かせけれど、「なにせむにか、命も惜しからむ。誰がためにか。何事も、用なし」とて、薬も食はず、やがて起きも上がらで、病み臥せり。

天人が持ってきた箱の中には天の羽衣と不死の薬が入っていた。地上世界という「穢き所」のものを食べたり、そこで「賤しき」人々と交流することによって、かぐや姫は次第に人間化していく。そんな彼女に、「いとけうら」で「老い」や「思ふこと」のない天人の属性を取り戻させるのが、天の羽衣と不死の薬なのである。

このように『竹取物語』における天の羽衣は、羽衣伝承（『伊香小江』等）のような飛ぶための道具ではなく、かぐや姫が育んできた人間としての心を「もの思ひ」がない天人の心へと改める働きを持っている。そしてこうした人間の心に対する本物語の着目は、前節でまとめたように、「物語の始まり」としての『竹取物語』の表現特性といえるものであった。以下、もう少し詳細にその特性を検討しよう。

先に引用した「伊香小江」の伝承でも、残された人間（伊香刀美）にとつて天女との別れは悲しいものとして語られていた。しかし『竹取物語』では、そうした別れの悲しさを人間化したかぐや姫も抱えていること、さらにそのような「人間としての心」をかぐや姫が天の羽衣によって失ってしまうことが、大きく異なっている。ちなみにここでの「人間としての心」とは、「翁を『いとほし、かなし』と思しつること」や帝を「あはれと思ひいでける」といった、親子や男女の情が中心である。これら人間として当然持つであろう感情も、かぐや姫は天の羽衣を着て天上世界へと帰る瞬間にすべて失ってしまうのである。

以上のように『竹取物語』では、別れの瞬間にかぐや姫が「人間としての心」をも失くしてしまうという設定にされている。そしてそのことで、読者に「人間としての心」というものの存在が印象付けられていくのである。「伊香小江」の伝承では親しい人との別れの悲しさのみが語られていたが、『竹取物語』ではそうした感情や心を持つ人間というものの存在についても描き出されているのである。

*

かぐや姫は天の羽衣を着せられようとした際、天人に向かって「衣着せつる人は、心異になるなりといふ」と述べている。この表現からは、着用すると「心異になる」という天の羽衣の機能について、彼女は以前から知っていたように読み取れる。

なるほど、確かに天人には「もの思ひ」がないことから、「人間としての心」を持つってしまった自分が天上世界に戻ったらどうなるのかについて、当然彼女は認識していたはずである。そしておそらく、人間化したかぐや姫にとつてそのこと（「心異になる」こと）は、大きな物思いの種になっていたのではないかと思われる。というのも、かぐや姫にとつて「人間としての心」を失うとは、愛する翁・媪のもと、長い時間をかけて育んだ自己の感情やアイデンティティを失うことでもあったからである。

ところで、このように愛する者と離ればなれになる際の人間のあり方について、和歌世界ではどのように描き出されているだろうか。例えば『古今和歌集』『離別歌』には、親しい人との別れに際し、たとえ身が離ればなれになっても心はともにあると

いった思いを詠んだ歌が見られる(三六七・三六八・三七三・三七八・三八〇)。数首取り上げてみよう。

① 限りなき雲居のよそに別るとも人を心におくらさむやは

(古今・三六七・よみ人しらず)

② たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきなどめそ

(古今・三六八・小野千古が陸奥介にまかりける時に、母のよめる)

③ 思へども身をしわけねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

(古今・三七三・東の方へまかりける人によみてつかはしける・伊香子淳行)

①は別れていく側が詠んだ歌。「限りなき雲居のよそ」まで行って離ればなれになるとしても、あなたを私の心から取り残して行くようなことはないと言っている。②は別れていく子に対して母が詠んだ歌。子を守るために付き添わせている自分の心だけは関所の役人も堰き止めないでとする。③も残される側の歌で、別れていくあなたを思うけれど身は分けられないため、私の心をあなたに連れ添わせると詠んでいる。このように『古今和歌集』『離別歌』には、思う人との離別に際して、別れていく人に残される人の心がついていくといった発想の歌群がみられる。そしてそこでの表現主体は、「身は別れても心は愛する人」ともにある」と考えることで、別れの辛さや悲しみを乗り越えようとしていくのである。

このような和歌世界で詠まれている「離別」時の人のあり方と並べてみると、かぐや姫は天人であるが故に、歌では「身は別れても愛する人」ともにある」とされる(人間としての)心をも天の羽衣によって喪失してしまう、といった状況にあることがわかる。つまりかぐや姫には、和歌世界で定型化されているような、親しい人との別れに際した人間の心の処し方——「心」を介した悲しみの乗り越え方——が許されていないのである。この点からも『竹取物語』では、「心異になる」かぐや姫の苦悩を通じて、より根源的な別れの悲しみが描き出されているといえよう。

では一方で、かぐや姫は翁・媼に対して、天上世界に帰った自分が「心異になる」ことを伝えたのだろうか。愛するかぐや姫が自分たちへの感情を失ってしまうと知ったならば、翁・媼の悲しみはより一層深いものとなる。なぜなら、自分たちの存在、それまで共に過ごした時間、それらがかぐや姫にとって全く無意味なものになるという事実(Ⅱかぐや姫が「心異になる」ために引き起こされる事実)は、かぐや姫の不在ということ以上に、かぐや姫を愛している翁・媼には耐えられない事態だと考えられるからである(前掲②歌にも、別れていく子に自分の心を付き添わせるとい

が詠まれているが、この歌でも「親子の心の通い合い」がその前提にある)。

そのため、「御心をのみ惑はして去りなむことの悲しく、堪へがたく侍るなり」など、二人を悲しませることが何よりも耐え難いと感じてきたかぐや姫が、「心異になる」という告白を二人にするとはい思われない。事実、二人への手紙のなかでかぐや姫は、「月の出でたらむ夜は、見おせ給へ。見捨てたてまつりて、まかる空よりも落ちぬべき心地ぞする」のように「月の夜は私が住んでいる場所を見て欲しいこと」や「自分は翁・媼を深く思いながら天に昇っていくこと」を書いていたのである。これらの文言からは、前掲の『古今和歌集』『離別歌』歌群の発想にあるような、「身は別れても愛する人」ともにある」といったかぐや姫からのメッセージを読み取ることでできよう。つまりかぐや姫は、人間化した姿のまま、翁・媼の心の中で生き続けることを選択し、そのことで「心はともにある」といった幻想を翁・媼にもたせ、二人の悲しみを和らげようとしているのである。「人間としての心」を持ったかぐや姫の配慮がここからは読み取れるであろう。

以上、本節では主として『竹取物語』『昇天』の場面を取り上げ、そこにみられる表現特性について羽衣伝承との関係をもとに考察した。次節ではこうした分析をもとに、『竹取物語』における具体的な単元案やそこでの学習課題案について提示する。

四

ここまでの議論を踏まえ、以下、「物語の始まり」という出来事に着目した『竹取物語』の単元案を挙げる。

【単元名】「物語の始まり」——『竹取物語』——

【学年】中学校一年生

【学習目標】「物語の始まり」と言われる『竹取物語』が、「物語」という形式で、どのような人間の姿を描き出しているのかを探る。

【学習の見通し】『竹取物語』の内容を大まかにつかんだ後、「昇天」場面の表現特性を羽衣伝承と比較しながら捉える。さらに、そこで捉えた「物語の始まり」としての『竹取物語』の特徴を、「まだ『物語』を読んだことがない平安時代の女房たちに対して『物語』の面白さを伝える」という「新聞記事」にして報告する。

【単元計画】次ページ参照

【単元計画】

学習活動	評価の観点
<p>1 『竹取物語』の解説を読み、作品の概要、および本作品が「物語の始まり」とされていることを知る。</p> <p>2 学習目標を確認し、学習の見通しを持つ。</p> <p>3 「冒頭」の場面を読み、内容を大まかにつかむ。</p> <p>4 音読を通して古文を読み味わう。</p> <p>5 「昇天」の場面を読み、物語の設定や登場人物の心情を読み取る。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>【学習課題】</p> <p>[1]「穢き所」という表現から、天人が考える天上世界と地上世界との関係を捉えよう。</p> <p>[2]「もの知らぬこと、なのたまひそ。」から、かぐや姫が天人に伝えたかったことを考えよう。</p> </div>	<p>・歴史的仮名遣いや古典の言葉の意味に注意して音読し、古文を読み味わっている [4]</p> <p>・本文をもとに、物語の設定や登場人物の心情を読み取っている [5]</p>
<p>6 「昇天」の場面を羽衣伝承・伊香小江と比較することで、「物語の始まり」としての『竹取物語』の表現特性を探る。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>【学習課題】</p> <p>[3]羽衣伝承と『竹取物語』とで、「天の羽衣」の機能はどのように異なるだろうか。</p> <p>[4]かぐや姫は「天の羽衣」の機能（「心異になる」こと）を、物思う前から知っていたのだろうか。また、それを知っているのと知らないのでは、「天の羽衣」を着て月の都へと帰らなければならないかぐや姫の、帰還前の物思いの深さは異なるだろうか。</p> <p>[5]かぐや姫は翁や媼に対して、「自分が天人になった（「天の羽衣」を着た）後の変化」（＝「心異になる」こと）を伝えているだろうか。あなたの考えを答えなさい。</p> <p>[6]羽衣伝承と『竹取物語』とでは「天の羽衣」の機能が変えられている。そのことをあなたはどう思うか（成功？あまり意味がない？）。天の羽衣の機能の変化がかぐや姫と翁媼、帝らとの別れの場面にもたらした効果等も考えて答えなさい。</p> </div>	<p>・比較を通じて『竹取物語』の表現特性が理解できている [6]</p>
<p>7 「物語の始まり」としての『竹取物語』の特徴を新聞記事にする。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>【記事の内容】</p> <p>【新聞記事の目的】 生徒が当時の新聞記者となり、まだ「物語」を読んだことがない平安時代の女房たちに対して、「物語の始まり」である『竹取物語』の面白さを伝えること。</p> <p>【状況】 『竹取物語』が書かれた直後に設定。仮名による物語・『竹取物語』の誕生に伴い、その面白さを伝える新聞記事を作成する。</p> <p>【完成形】 A 4で1枚の特集記事とする。</p> </div>	<p>・「物語の始まり」としての『竹取物語』の表現特性を紹介する記事が書けている [7]</p>

ここでは本単元を中心とする「6」と「7」の学習活動について解説する。
6の学習活動では、まず「物語の始まり」について、学習プリント（【資料1】）を使って説明する。そこで生徒に提示する文章は以下の通りである。

「物語の始まり」には様々な考え方があります。ここではその一つを、非常に単純化した形で述べたいと思います

まだひらがなが生まれる前から人々に語り継がれ、時には漢文で記述もされた伝承の話があったとします。物語の始まりは、このような伝承の話の構成や枠組みなどが用いられつつ作られたフィクション（虚構）作品の誕生をもって説明されます。そして、その際に重要な要素として作用したのが、「ひらがなの誕生」と、そうしたフィクションを生み出した作者が持っていた「人間や人間の心への関心や問いかけ」だと言われています。

つまり、物語の作者となった人は、「人間ってどういう存在なんだろう？」とか「人間の心って不思議だな」といった「人間や人間の心への関心や問いかけ」を抱いていて、それをひらがなによる物語（フィクション作品）という形に置き換えていったのですが、そうした物語へと置き換える（フィクション作品を作る）際に利用されたのが、当時流通していた伝承の話の構成や枠組みだったのです。この授業では「物語の始まり」について、以上のように考えたいと思います。

次に、現代語訳した羽衣伝承（伊香小江）と『竹取物語』「昇天」の場面とを比較することで、「物語の始まり」としての『竹取物語』の表現特性を探る。その際、前掲【単元計画】中の【学習課題】「3」～「6」を考えることとする。

【学習課題】

「3」羽衣伝承と『竹取物語』とで、「天の羽衣」の機能はどのように異なるだろうか。

「4」かぐや姫は「天の羽衣」の機能（「心異になる」こと）を、物思う前から知っていたのだろうか。また、それを知っているのと知らないのでは、「天の羽衣」を着て月の都へと帰らなければならぬかぐや姫の、帰還前の物思いの深さは異なるだろうか。

「5」かぐや姫は翁や媼に対して、「自分が天人になった（「天の羽衣」を着た）後の変化」（＝「心異になる」こと）を伝えているだろうか。あなたの考えを答えなさい。

「6」羽衣伝承と『竹取物語』とでは「天の羽衣」の機能が変わっている。そのことをあなたはどうか思うか（成功？あまり意味がない？）。天の羽衣の機能の変化がかぐや姫と翁媼、帝らとの別れの場面にもたらした効果等も考えて答えなさい。

それぞれの【学習課題】について簡単に解説しておく。まず「3」では、両作品における「天の羽衣」の機能の違いを確認する。これは、複数のテキストを、共通する素材の描かれ方の相違に注目して比較する」という学習だが、この比較を通じて生徒には、『竹取物語』が「人間としての心」の有無に着目していることを理解させたい。

「4」では、まず、「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。」というかぐや姫の発言や、もともと彼女は「もの思ひ」のない月の世界の住人であったことから、かぐや姫が「天の羽衣」の機能を知っていたであろうことを捉えさせる。さらに、そのようにかぐや姫が「心異になる」とは、育ててくれた翁や媼への「いとほし、かなし」といった感情をはじめ、二人のもとで育んだ自己のアイデンティティをも失ってしまった事象であること、そのため、そのことを知っていたはずのかぐや姫にとって大きな物思いの種になっていたのであることを理解させたい。

「5」では、まず、愛するかぐや姫が自分たちへの感情を失ってしまうと知ること、翁・媼にとって耐えられないほどの悲しみであることを捉えさせたい。その上で生徒からは、二人を悲しませることが何よりも耐え難いと感じてきたかぐや姫が、「心異になる」という告白を二人にするとはいわれないこと、そのため、それを告げずに去っていくことがかぐや姫の優しさであろう、などの意見が出て欲しいと考える。以上「4」「5」の学習課題では、愛する者たちの別れの場面において「天の羽衣」が、より根源的な悲しみを描出するのに役立っていることを理解させたい。

「6」は、これまでの【学習課題】を踏まえ、羽衣伝承（伊香小江）と『竹取物語』「昇天」の場面における「天の羽衣」の働きの違い、およびそれがもたらす表現効果を批評するという活動である。ここでは、「天の羽衣」の機能を変えることで別れの瞬間に「人間としての心」をも失くしてしまうという設定にされていること、そしてそのことによって、別れの悲しみだけではなく、「別れを悲しむ人間の姿」こそが特に描き出されようとしているなど、『竹取物語』の表現特性をおさえた意見が期待される。

以上のように6は、複数のテキストを、共通する素材の描かれ方の相違に注目して比較することによって、そこで明らかとなった表現特性を批評するといった学習活動

となっている。こうした活動を通じて生徒には、心を持つ人間存在のありようが『竹取物語』では描き出されていることを理解させたい。

次に7の学習活動では、6での学びをリアルな文脈で活用するべく、新聞記事の作成という言語活動を行うこととした。

【記事の内容】

【新聞記事の目的】生徒が当時の新聞記者となり、まだ「物語」を読んだことがない平安時代の女房たちに対して、「物語の始まり」である『竹取物語』の面白さを伝えること。

【状況】『竹取物語』が書かれた直後に設定。仮名による物語・『竹取物語』の誕生に伴い、その面白さを伝える新聞記事を作成する。

【完成形】A4で1枚の特集記事とする。

それまでの伝承作品とは違って、「人間としての心」のありようをこそ描き出す物語（『竹取物語』の誕生は、当時の読者にとって衝撃的なものだったと考えられる。そこで、いち早く物語という存在に触れ得た記者が、その面白さを、主たる読者となっていく女房たちに伝えるという場を設定した。生徒たちには本単元で学んだことを活かし、『竹取物語』の新しさや面白さ、そこで描かれている人間の姿などについて再度自分のなかで整理し、記事という形で報告することで、『竹取物語』の理解をより一層深めて欲しいと考えている。

五

以上、本稿では『竹取物語』が「物語の始まり」とされていることに着目し、以下のことを論じた。①「物語の始まり」とはどのような表現のあり方を指しているのか、先行研究をもとに整理した。②それが『竹取物語』にはどのようにみられるのか、教科書に採録されている「昇天」の場面を中心に分析した。③そうした『竹取物語』の表現特性について、生徒が読解を通じて理解したり評価したりできるような学習課題案、およびそこで学びを活用し理解を深めるための言語活動案を提示した。

しかし、たとえば最後の言語活動についての評価法の作成（ルーブリック評価が望ましい）など、中学校で実践するためにはまだまだなすべき課題は多い。こうした評価案の作成や授業の実際など、すべて後稿を期したい。

注

注1 本稿で扱う「物語の始まり」は、作り物語としての物語文学の始まりを指している。

注2 『風巻景次郎全集 第3巻 古代文学の発生』（桜楓社、一九六九・八、一〇〇頁）。

注3 秋山虔「竹取・伊勢・源氏——仮名文の語り」（『国文学 解釈と教材の研究』一九八五・七、八頁）。

注4 秋山注3論文、九頁。

注5 秋山注3論文、一〇頁。

注6 「王朝の文学空間——その始発」（『王朝の文学空間』東京大学出版会、一九八四・三、一四頁）。

注7 高田祐彦『竹取物語』の心とことば」（『平安文学史論考』武蔵野書院、二〇〇九・一二、六二頁）。

注8 高田祐彦「かな文学創造——竹取物語と古今和歌集——」（『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三・九、二九頁）。ちなみに高田は、この引用の直前で、「人間の心を描くことが成立当初の物語文学にとって本質的な要素であったか否か、議論の余地のあるところだが」と述べている。その理由については、注7の論文で、『竹取物語』以外の作品が失われてしまっているために、その内容が断片的にししか確かめられないことにもよるが、人間の心を描くという点で、『竹取物語』が初期物語の中で際立ってすぐれた達成を示していると考えられるからである」とし、「如上の議論はあくまでも『竹取物語』に即しての物語文学成立の議論である、という留保をつけておきたい」と説明している（高田注7論文、七一頁）。

注9 高田注8論文参照。

注10 渡辺秀夫『竹取物語』と神仙譚——初期物語成立史階梯」（『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、一九九一・一）など。

注11 久保堅一「『竹取物語』と伝伝」（『中古文学』77号、九頁）など。

注12 吉田幹生『竹取物語』難題求婚譚の達成」（『日本古代恋愛文学史』笠間書院、二〇一五・二）。

注13 吉田幹生「物語文学誕生前史」（『国語と国文学』二〇〇九・五、八頁）。

注14 野口元大「解説 伝承から文学への飛躍」（『新潮日本古典集成』『竹取物語』一

九七九・五、九一〇（九二頁）。

注 15 柳田国男「竹取翁」『昔話と文学』白鳳社、一九七一・一一、三五～三七頁。初出は『国語・国文』四卷一号、一九三四・二。

注 16 吉田注 12 論文など。

注 17 関敬吾「天人女房」『日本昔話集成 第二部の 1』角川書店、一九五三・四、一九四頁。

注 18 書き下し文は、日本古典文学大系『風土記』によった。

注 19 関敬吾は注 17 書において、羽衣伝説を「一、近江型。これは更に七夕信仰と結合せる型と英雄乃至は一族の祖の出自を物語る型とに分れる。」「二、三保型」「三、丹後型」といった系統に分けている。「伊香小江」のような「一族の祖の出自を物語る型」は、羽衣伝説の代表的な語り口だと言える。

注 20 妻を失い「唸詠する」など。高橋亨はそこに「文芸表現の萌芽」を見て取っている（「竹取物語論のために」『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会、一九八七・一一、七四頁）。

注 21 奈良社のものである『竹取物語』と類似した設定をもつ羽衣伝承もあるが、今回は中学校の教科書に取り上げられている昇天場面を問題とするため、「伊香小江」の伝承を比較教材として取り上げている。

注 22 土方洋一「仮名物語の想像力・覚え書」『鶴見大学紀要』第 21 号第 1 部、一九八四・二、四四頁）。

注 23 例えば「庫持の皇子が蓬萊の珠の枝（の贖物）を持ってきた時には、『あはれとも見でをる』という態度であったかぐや姫が、石上の中納言の墜死に際しては『少しあはれ』と思い、さらに昇天の場面では、みかどに宛てて『君をあはれと思ひ出でける』という歌を詠むという具合に、心を深く動かされる意の『あはれ』という感情を次第に身につけていく」様子など（土方洋一「かぐや姫の創造」前田雅之等編『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ「古典編」1 右文書院、二〇〇三・一、七頁）。

※本文の引用は、新潮日本古典集成『竹取物語』、日本古典文学大系『風土記』、新日本古典文学大系『古今和歌集』によった。

【資料1】

物語の始まり

「物語の始まり」には様々な考え方があります。ここではその一つを、非常に単純化した形で述べたいと思います。

まだひらがなが生まれる前から人々に語り継がれ、時には漢文で記述もされた伝承の話があったとします。物語の始まりは、このような伝承の話の構成や枠組みなどが用いられつつ作られたフィクション（虚構）作品の誕生をもって説明されます。そして、その際に重要な要素として作用したのが、「ひらがなの誕生」と、そうしたフィクションを生み出した作者が持っていた「人間や人間の心への関心や問いかけ」だと言われています。

つまり、物語の作者となった人は、「人間ってどういう存在なんだろう？」とか「人間の心って不思議だな」といった「人間や人間の心への関心や問いかけ」を抱いていて、それをひらがなによる物語（フィクション作品）という形に置き換えていったのですが、そうした物語へと置き換える（フィクション作品を作る）際を利用されたのが、当時流通していた伝承の話の構成や枠組みだったのです。この授業では「物語の始まり」について、以上のように考えたいと思います。

伝承との関係

◆『竹取物語』はいくつかの伝承が利用されて創作されたと考えられている。ここではその一つである羽衣伝承（伊香小江の伝承）を取りあげる（漢文で書かれているものを現代語に訳した）。

羽衣伝承・伊香小江（いかごのおうみ）

昔の事をよく知っている老人が語ってくれたことには、近江国伊香郡与胡郷よごのさとの南に伊香の小江いかご（小さな入り江）があった。八人の天女が白鳥になつて天より降りてきて、入り江の南の船着き場で水浴びをしていた。それを西の山にいた伊香刀美いかとみ（主人公）が遠くから見ているところ、その白鳥は不思議な形をしていた。そのため、もしかしたら神様ではないかと疑

い行つて見ると、本当に神様であった。伊香刀美はそのまま天女に心ひかれてしまい、帰り去ることができなかった。そこでこっそりと白い犬を遣して天の羽衣を盗み取らせるところ、一番下の天女の衣を得たので、それを隠した。天女たちは異変に気づき、七人は天に昇っていったが、一番下の天女は飛び去ることができなかった。その後、天への路は長い間閉ざされ、天女は地上の民となった。天女たちが水浴びをしていた浦は、今の「神の浦」と言う場所である。

伊香刀美は天女と夫婦となつてここに住み、子どもも生まれた。男の子二人、女の子二人である。兄の名は意美志留おみしる、弟の名は那志登美なしとみ、女の子の名は伊是理比咩いぜりひめ、次女の名は奈是理比売なぜりひめ、彼らは伊香の連むらじ（姓）たちの先祖である。後に母は天の羽衣を探し出し、それを着て天に昇った。伊香刀美は独りむなしく床の中で嘆き続けたのだった。

◆「物語の始まり」と言われている『竹取物語』では、こうした羽衣伝承の枠組み（天上世界から来た天女が地上世界にしばしとどまった後、天の羽衣を着て天上世界に戻っていく）が利用されつつ、どのような人間の姿・人間の心のありようが描き出されているだろうか。